成人・老年看護学実習Ⅱ（終末期の看護）

Ⅰ．目的

成人の終末期にある対象及び家族の特徴を理解し、最期のときまでその人らしく生きるための援助ができる基礎的能力を養う。

Ⅱ．目標

1. 終末期にある対象及び家族を身体的・精神的・社会的・霊的側面から総合的に理解できる。
2. 終末期にある対象及び家族の思いや希望にそった日常生活援助ができる。
3. 対象がよりよく生きるために、全人的苦痛を緩和できる。
4. 病状の変化に影響される対象及び家族の死の受容過程にそった援助が理解できる。
5. 危篤時及び死後の看護が理解できる。
6. 看護を通して生命の尊厳と死生観について自己の考えを明らかにできる。

Ⅲ．実習時期

2 年次後期～3 年次後期

Ⅳ．実習場所

岡山医療センター：８Ｂ・10B・西 4

Ⅴ．行動目標および学習内容

実習目標	行動目標	学習内容
1. 終末期にある対象及び家族を身体的・精神的・社会的・霊的側面から総合的に理解できる。	1) 現在の病状がどのような状態であるかが述べられる。 2) 治療方針・治療内容が述べられる。 3) 対象を全人的に捉え述べられる。	終末期にある対象の理解、身体的側面の把握、病状の理解、出現している症状とメカニズム 治療方針・治療内容の理解（化学療法、放射線療法、薬物療法、対症療法など）、予後の見通し・今後の方向性 精神的側面の把握、社会的側面（人間関係・仕事・社会的地位・経済面など）の把握、霊的側面の把握（生きる意味への問い、死に対する考え方、人生の苦悩への問い、罪悪感、死後の世界についての問い、希望についての問い、宗教　など）及び身体的側面を含めた相互の関連性
2. 終末期にある対象及び家族の思いや希望にそった日常生活援助ができる。	1) 対象の苦痛に配慮した日常生活援助ができる。 2) 対象の状態から自尊心を尊重した日常生活援助ができる。 3) 対象及び家族の思いや希望を考慮した援助ができる。	ADL 状態の把握、日常生活への援助 対象及び家族の希望・要望の把握 対象及び家族の持つニーズに沿った援助、対象及び家族の希望に添う援助

実習目標	行動目標	学習内容
	4) 対象の QOL について考えることができる。	対象の QOL の理解
3. 対象がよりよく生きるために、全人的苦痛を緩和できる。	1) 症状緩和のための援助ができる。 2) 治療・処置に伴う援助について述べられる。 3) 精神的・社会的・霊的苦痛の緩和に向けた援助ができる。	疼痛（鎮痛薬の使用の基本原則、鎮痛薬の種類、作用・副作用、麻薬の管理）、呼吸困難、消化器症状、全身倦怠感など、身体的苦痛に対する援助 化学療法・放射線療法の援助方法と副作用や合併症の観察（対症療法） 傾聴、共感、受容、タッチングなど、対象にとっての意味を考えた意図的な援助
4. 病状の変化に影響される対象及び家族の死の受容過程にそった援助が理解できる。	1) 対象及び家族の死に対する気持ちを述べられる。 2) 対象及び家族の死の受容過程について述べられる。 3) 対象への意思決定を支える援助について述べられる。	家族の危機対応能力、予期悲嘆、役割移行、対象及び家族の関係性の理解、対象の持つ力を支える援助、ケアリング、エンパワーメント 死に向かう患者の心理（否認と隔離、怒り、取り引き、抑うつ、受容）、悲嘆のプロセス インフォームドコンセントにおける援助、意思決定に向けての援助、生きる意味を見いだす、療養の場の選択（一般病棟における緩和ケア）
5. 危篤時及び死後の看護が理解できる。	1) 危篤時の対象および家族への援助について述べられる。 2) 死後の処置の方法、留意点について述べられる。	危篤時の患者への援助（危篤時の観察、家族ケア、人生を全うし、最後を迎える対象を尊重した態度）、生命の活動停止と死の判定 対象や家族を尊重した態度、死後の処置、ご遺体に配慮した対応方法、グリーフケア
6. 看護を通して生命の尊厳と死生観について自己の考えを明らかにできる。	1) 対象との関わりを通して生命の尊厳と死生観について自己の考えを明確にすることができる。 2) 対象との関わりを通して自己の看護を振り返ることができる。	生命の尊厳、死生観、死を迎える対象との関わりから生命に対する尊厳、死に対する自己の思い、考え、全人的苦痛の理解 対象との関わりを通して起こる自己の情動・感情（ストレス、不安、悲しみ、無力感、達成感、充実感）、死の受容過程の振り返り